

企業スポーツ選手が 世界の舞台への出場に挑む、 熱い想いとその取り組み

NTTコムウェア企業スポーツ選手が、
世界を知る為末大氏と企業スポーツと
世界の舞台について語る



NTTコムウェアは、スポーツ振興を目的に今後の活躍が期待される選手や、日々業務に従事しながらスポーツに取り組む社員を支援しています。陸上男子400メートルハードルで世界陸上競技大会メダリストの為末 大様をお迎えし、企業スポーツ選手として世界の舞台をめざす選手と「仕事」「競技」、そして「世界で活躍するには」をテーマに大いに語り合いました。

ビーチバレーとボッチャの魅力とは？



為末 大氏
一般社団法人アスリートソサエティ
代表理事
1978年広島県生まれ。スプリント
種目の世界大会で日本人として初の
メダル獲得者。3度のオリンピックに
出場。男子400メートルハードルの
日本記録保持者(2017年7月現
在)。現在は、スポーツに関する事業
を請け負う株式会社侍を経営、一般
社団法人アスリートソサエティの代
表理事を務める。

為末: まずは、それぞれのスポーツの魅力や特長について聞かせてください。

黒川: ビーチバレーのルールは、6人制のバレーボールとほぼ同じです。大きな違いは、浜辺などの「砂の上」で「2人でやる」ところ。太陽の光や風が大きく影響するスポーツで、コートによって有利不利が生じてしまいます。そのため相手チームの得点と自分たちの点数を合計して7の倍数になったときにコートチェンジをします。試合中に何度もコートチェンジをする珍しいスポーツです。

為末: 黒川選手が感じる「強い選手」には、どんな能力や要素が備わっていますか。

黒川: コートに2人しかいないので、ボールを落とせる「穴」がたくさんあります。スパイクなど力技だけではなく、「人がいないところにうまく落とす」ことで点を取る技術、視野の広さ、経験を兼ね備えた選手は強い選手ですね。

蛭沢: ボッチャは、「ジャックボール」という白いボールに、自分たちのボールをいかに近づけるかという競技です。個人戦では、1人が6球、赤か青のボールを持ちます。赤が先攻と決まっています。まずはジャックボールを投げ、ジャックボールに近づけるように赤いボールを投げ、次に青の選手が投げます。その後には、ジャックボールから遠いボールの選手から投げます。

為末: カーリングに似ている競技ですね。点数は、ジャックボールに近いと1点というように数えるのですか？

蛭沢: 例えば、ジャックボールと青のボールの間に赤いボールが3つあると赤に3点が入ります。すべてのボールを投げ終わると1エンドが終了で、合計4エンドで勝敗を競います。ジャックボールにボールをぶつけて動かして、相手がやりにくいようにするところなど、ビリヤードにも似ています。ジャックボールも自分で投げるので、相手が遠くに投げるのが不得意だったら、遠くにジャックボールを投げて攻めにくくしたり、「性格悪い」ですよ(笑)。



黒川 魁(ビーチバレー選手)
NTTコムウェア 株式会社
総務人事部 CSR推進室



蛭沢 文子(ボッチャ選手)
NTTコムウェア 株式会社
ネットワーククラウド事業本部
事業企画部
企画部門 育成担当

企業スポーツ選手が世界の舞台への出場に挑む、熱い想いとその取り組み

為末: お2人はお互いのスポーツのこと、知っていましたか?

黒川: いいえ、あまり知りませんでした。「投げる」ということは、転がすだけではなく上から投げてもいいのですか?

蛭沢: はい。上からでもいいし、下からでもいい。もちろん転がすのもあります。ただ、転がすとボールをうまく止めるのが難しいので、最近ではめざす場所で止まるように放物線を描いて投げる選手が多いです。コートは、バドミントンコートくらいの広さです。私もビーチバレーのこと、実はよく知りませんでした。黒川さんから聞くまで2人でやるということすら知りませんでした。

黒川: コートが砂になると動けないし、床と違って反発がないだけに高く跳べないのです。それでもネットの高さはバレーボールと同じです。コートは少し狭いのですが。あと、バレーボールには「指の腹」を使ってボールをコントロールするフェイントが認められていますが、ビーチバレーでは禁止です。スパイクのように打つか、指の関節を曲げてプッシュするか、指を伸ばして突くかしかできないのです。細かい制約があるからこそ技術と経験がものをいうスポーツです。

仕事での「勝ち負け」はスポーツと違い長期的に決まる

為末: お2人がNTTコムウェアに入社し、企業スポーツの選手として世界の舞台をめざすようになったきっかけを教えてください。

黒川: 私は、日本オリンピック協会(JOC)の「アスナビ」を通じて、2017年に入社しました。企業の担当者の方々に前にプレゼンテーションする機会があり、自分の経歴と抱負をスピーチして、それがきっかけでNTTコムウェアの担当者から声がかかりました。

為末: スポーツからICT企業は「遠い世界」ですが、入社時に不安はありませんでしたか。



黒川: NTTグループは野球チームやラグビーチームやバドミントンなどスポーツをサポートしています。上司も野球部出身であるように、スポーツ経験者が多く不安はありませんでした。むしろ、「サポートをする」と力強く言っていただけだったので、ぜひお願いしようと思いました。

為末: スポーツ選手が企業にいて何ができると思いますか。



黒川: 私の所属はCSR推進室なのですが、入社して間もないこともあり、正直、仕事らしい仕事はまだできていません。だからこそ、ビーチバレーで結果を出して、少しでもみなさんに「よかった」と思ってもらえるようにしたいです。

為末: 黒川選手は「アスリート社員」という位置付けです。まさに世界の舞台での活躍を期待されての採用ですね。

黒川: はい。仕事と競技では、競技の割合は高いです。ビーチバレーのシーズンは例年、5月の1週目から始まり、10月か11月に終了します。その時期は月曜日と火曜日が出社日で、午前中練習してから午後には仕事となり、土日が試合というサイクルになります。

企業スポーツ選手が世界の舞台への出場に挑む、熱い想いとその取り組み

為末: スポーツと仕事の関係を考えてとき、私は引退して4、5年が経過しますが、スポーツの世界と一般社会でまったく違うと感じたのは、社会では「明白な勝ち負け」にさらされる機会が少ないということでした。スポーツは、先週末の試合で「あなたは敗者でした」という事実が突きつけられる世界でしょう。

黒川: 試合に負けたら、まさに、その通りです(笑)。

為末: 一方、会社の仕事は、勝ったか負けたかがすぐには分かりにくい。それでも、長期的には決まっています。勝ち負けだけではない側面もあり、そちらのほうが重要だったりする。黒川選手がスポーツと仕事とをつなげていく上で、スポーツで勝つために意識していることは、仕事にも役立つと感じていますか。

黒川: スポーツの勝負では準備が重要だと思っています。試合が始まってしまったら、それまでの準備で結果がおのずと決まってきます。勢いだけでどうこうなるほど甘くはない。勝負の本当の大切な場面は、それまで「いかに準備してきたか」で決まると感じています。そのことはいつも肝に銘じて、しっかり準備して挑むようにしています。手ぶらでは戦いに向かわないということです。

為末: その気持ちは、新入社員の方々などへのメッセージにいい話だと思います。私も会社を経営していますが、取引先との会議や打ち合わせのとき、明確に「これで落とすぞ」という気持ちでいく場合と、「ふわっ」とした気持ちで臨んでしまう場合があります。ふわっとした気持ちで会議や打ち合わせに参加すると、こちら側へ次々と厳しい要求が突きつけられてくる。蛭沢選手は、ご自身の仕事と競技で共通点があると感じるところはありますか。

蛭沢: 私は入社してからボッチャを始めました。ボッチャを始める前は通常の会社員として、みなさんと一緒に仕事をしていました。企業アスリートになってからは、仕事でもスポーツでも結果を求められるので、やはり日頃からの細かな準備が必要です。仕事では、企画担当として社員育成のサポートをしています。NTTコムウェアにはさまざまな資格の認定制度があって、それを取得するための準備や試験に向けてどうすべきかといった部分をサポートする業務です。実は競技でもチームの選手を育てる立場でもあり、共通点がありますね。

為末: 障がい者スポーツの選手は、競技人生が長いのが一般的です。例えば陸上競技などで世界をめざす選手の多くはピークが短く、勝てなくなると引退を余儀なくされますが、それとは違う考え方で取り組んでいるのかと思います。さらに蛭沢選手は企業スポーツの選手として、世界レベルでの活躍が期待される強化選手に選ばれています。今の心境はどういったお気持ちですか。

蛭沢: 今回シンボル選手に認定いただき、社員として業務をしながら、競技の練習時間や遠征費用などのサポートを受けています。日本はボッチャの団体戦が強く、レベルは世界トップクラスで、世界の舞台で銀メダルを取りました。ボッチャへの注目度も高まり、その中でも強化選手に選ばれたのは光栄である反面、プレッシャーも感じています(笑)。ボッチャは、競技人生が長いので、それだけに今強い選手はこの先も強いままの可能性が高いのです。倒すのは本当に大変です。仕事でも競技でも結果を求められるので、メンタルが強くないとできません(笑)。



企業スポーツ選手が世界の舞台への出場に挑む、熱い想いとその取り組み

仕事、競技、そしてボランティア。3つを「両立」させるための取り組み



為末: お2人はスポーツだけでなく、仕事はもちろんボランティア活動にも取り組んでいます。

黒川: 昨年から始めたボランティアでは、バレーボール教室をやっています。子どもたちにバレーボールを教えているのですが、子どもたちが楽しそうにやっているのを見ると、すごく嬉しい気持ちになるのです。この取り組みは、続けていきたいと思います。ボランティアを始めてからは、生活にメリハリができたように感じています。「仕事に集中する日、練習に打ち込む日、そして今日はボランティア」というように。すごくいいリズムになっていると感じています。

蛭沢: 私は、近隣の小学校で福祉の授業の講師をボランティアでしています。ボッチャを教えますが、動きがない競技なので、最初は子どもたちもあまり興味を持たないのです。それが、模範演技を見せると「おお」と、急に興味を持ち始めるのが手に取るように分かる。最後に子どもたちに体験してもらい、盛況で授業が終わるとやっていてよかったなと思います。

為末: 子どもたちの気持ちがボッチャを通じて、少しずつ変化していくのが分かるイメージですか。

蛭沢: こちらが車いすだから、最初は子どもたちも「何もできないのではないか」と思うのでしょうか。そんな気持ちもボッチャの授業を通じて、いつの間にか変化していることが多いです。

また、最近では「ユニバーサルボッチャ」というネーミングで、子どもからお年寄りまで、障がいのあるなしに関係なく、みんなで一緒にできるスポーツとして広く普及させようという取り組みがあります。そうしたことにも関わっていきながら、ボッチャを広くみなさんに知っていただき、実際にやってみて楽しんでいただきたいと思います。小学生でもスポーツが苦手な子もいるでしょう。そんな子でもボッチャの体験がスポーツを始めるきっかけになればいいし、老人ホームでもお年寄りがみんなで楽しみながらできます。

為末: 僕も元アスリートだからよく聞かれるのですが、子どもから「スポーツで学んだことは何ですか」と尋ねられたら、何と答えますか？

黒川: 私はチームスポーツであるバレーボールを通して、チームワークや人との協力を学びました。バレーボールは次の人につなげなくてはならないため、相手が何を考えていて、「どこにボールが欲しいのか、どういうパスが欲しいのか」などは常に考えながらやっています。子どもたちにも「一人でやっているのではない」ということを伝えています。

蛭沢: 私もチームワークですね。特に障がい者スポーツは、障がい者がまちまちなので、その違いを理解しつつ、誰が次に攻めていくかなどを話し合って進めていきます。障がいによって投げ方も異なるので、チームの他の選手のことを理解しつつ、チームワークを高めていかなくてはなりません。団体戦のときは、私がここに投げるから、次の選手には「こう攻めて」というように、話し合いながら進めていくことが重要です。



企業スポーツ選手が世界の舞台への出場に挑む、熱い想いとその取り組み

シンボル社員として発信する「メッセージ」とは



為末:世界の舞台での飛躍をめざすアスリート社員でもあり、対外的にはボランティア活動もして、まさに「シンボル社員」という言葉がお2人にはあっていると感じています。「シンボル」になるということは、何かを「体現すること」だと思います。競技をやりながら、どんなことを社会にメッセージとして伝えていきたいと考えていますか。

蛭沢:ボッチャは、障がい者スポーツの中でも重度の障がいを持つ人が多い競技です。そんな私たちでも競技をできているので、みなさんもぜひ、さまざまな分野で頑張っていただけたらと思います。勇気づける、元気づけるという意味合いです。

黒川:自分が頑張っている姿を多くの人に見ていただき、黒川が頑張っているから僕も私も頑張ろうと思ってもらえると、とてもうれしいですね。

為末:世界レベルでライバルたちと競い合いあうには、まずは、国内の予選を勝ち抜いて出場権を得なくてはなりません。これからの数年間、どんなことを心がけて取り組みますか。

黒川:世界トップレベルの大会になると、日本国内の代表決定戦をやって勝ったチームと、世界ランキングの上位か、アジア予選で優勝したチームが入ることになるでしょう。すでにライバルたちとの競い合いは始まっています。どれだけの準備をできるか。そこが勝負と考えています。為末さんは、世界的な大会に向けた1年ごとの準備はどのようにしていたのですか。

為末:世界の大舞台までに仮に4年あるとしても、最後の1年はコンディション作りになると思います。そう考えると、正味1年半から2年あるかどうか。要点を絞り込んで練習しました。私の場合は、4年間でやることを2つか3つに絞り、400メートルのベストタイムを0.3秒短縮するという目標を決めて、ハードリングの歩数を1歩減らすように取り組みました。1歩でだいたい2.3メートルなので、1.5歩減らすとちょうど0.3秒短縮できる計算でした。陸上は数値が出やすいので、具体的に計算してやるべきことを絞り込んで、選択と集中とチェックで取り組みました。

蛭沢:ボッチャは世界ランキングで決まります。日本は団体戦ではランキング上位に入っていますが、私が個人戦に出るには世界ランキングにランクインするために国内を勝ち抜き、世界ランキングを得られる権利を取ってからという順序になります。開催の約半年前に最後の選考がありますが、世界ランキングで決まるので10カ月前くらいには、だいたい出場できるかどうか分かってきます。

為末:世界の舞台に立って、競技を終えた後、競技を通じてこんなメッセージを伝えたいと考えていることはありますか。

黒川:世界トップレベルの競技を見て、盛り上がった子どもたちに向かって、すべての選手、もちろんメダルを取った選手も、最初から素晴らしいパフォーマンスができたわけではないということを伝えたいです。

蛭沢:スポーツも日々の努力だし、仕事も日々の努力です。努力を積み重ねないと決して上にはいけないということを伝えたいと思っています。



企業スポーツ選手が世界の舞台への出場に挑む、熱い想いとその取り組み



為末: 私は引退してからの仕事で多くの方々と出会った中で、世の中に発信されるメッセージやスピーチの中に、アスリートの言葉が取り上げられる割合がすごく高いことに気が付きました。例えば有名な選手の逸話などは何回も、いろいろな人のスピーチに取り上げられているでしょう。アスリートの取り組みや言動は、シンプルだし伝えやすい。私はSNSを利用していますが、勝つために大切だったこと、自身が成長するために必要だったことなどをアスリートとして、シンプルなメッセージとして伝えていくことは大切なことだと感じています。

黒川: 私もSNSを活用して試合の告知などを行っています。残念ながらビーチバレーはメジャースポーツとは言えないので、まず、試合に観に来てもらうことが大切だと感じています。

為末: お2人は、今、まさに世界の舞台に向けて日々、努力しているアスリート社員なので、そんなお2人からのメッセージは多くの人の心に響くと思います。シンボル社員として、競技、仕事、そして発信も含め頑張ってください。

<黒川選手へ>上司からのメッセージ

私自身も野球選手として採用されました。そのせいか、職場にアスリートがいることは、ごく自然のことに感じています。なおかつ、黒川選手がいる同じフロアには野球部のOBが4人もいます。騒がしい職場です(笑)。そういう雰囲気職場なので、黒川選手もなじみやすい、親しみやすい環境なのではないでしょうか。

私自身も現役時代は、野球と仕事を両立させようと取り組んでいました。その中で、常に忘れてはならないなと感じていたのは、支えてくれる上司・同僚やチームメート、スタッフの方々など「人への感謝の気持ち」でした。黒川選手が入社してきたことで、そんなことを思い出し、私も気持ちを新たに仕事に取り組むのと同時に、自分が成し得なかった夢を彼に託している気さえしています。

名前のとおり、コムウェアの魁(さきがけ)として大きく羽ばたくことを願っています。



宮本 武
NTT コムウェア株式会社
総務人事部 CSR 推進室
人権啓発担当・環境保護
推進担当 担当課長

<蛸沢選手へ>上司からのメッセージ

アスリート社員が会社にいることでさまざまな効果をもたらしていると感じています。例えば、社員の一体感の醸成や社会貢献です。特にアスリート社員が、自分たちの競技を頑張り、それを社員が応援することによって一体感が醸成され、それがひいては職場のコミュニケーションの活性化につながるという効果に期待しています。

その意味では、蛸沢選手は非常によく頑張り、職場に貢献していると感じています。4月からシンボル選手となり、競技の練習や試合、合宿などで職場に来られる時間が少なくなりましたが、チームとしての成果をあげるために、職場の上司・同僚・本人で仕事を効率化し、より良いアウトプットを実現するためにさまざまな議論をしながら、時には蛸沢選手からアドバイスをもらったりと、皆でチーム運営を考えてくれています。そのことが、チームワークの醸成、職場の一体感にもつながっていると感じています。



寺田 郁雄
NTT コムウェア株式会社
ネットワーククラウド事業本部
事業企画部
企画部門 人事担当
担当課長

※所属部署、役職等については、取材当時のものです。



NTT コムウェア株式会社

URL : <http://www.nttcom.co.jp/>

WEB 掲載 : 2017.7